礼拝と音楽 online
パイロット版

主日礼拝に備えて

説教者・奏楽者とともに
「4年サイクル主日聖書日課」による



日本基督教団出版局の業務縮小により、『礼拝と音楽』は209号をもって休刊となりましたが、その後多くの読者の方々から休刊を惜しむおことばをいただきました。とくに礼拝準備のために「主日礼拝に備えて」を頼りにしてくださっていた読者が多くおられたことを教えられました。

「主日礼拝に備えて」の11月22日分までは日本基督教団出版局のホームページからダウンロードできるようになっていますが、その先のことは未定でした。そこでこれまでの『礼拝と音楽』編集委員と話し合い、今後も有志が執筆し、継続して出版局のホームページからダウンロードできるようにさせていただくことといたしました。このために多くの方々が、ボランティアでの原稿執筆を積極的に引き受けてくださいました。心から感謝を申し上げます。今回は3月28日（復活祭）までの「礼拝に備えて」をお届けします。

『礼拝と音楽』は休刊となりましたが、これからも礼拝は続きますし、礼拝は常に新しくなり続けなければならないと思います。そのために『礼拝と音楽』が果たしてきた役割はこれからも継続されなければならないとわたしたちは考えています。

今後「主日礼拝に備えて」を軸にしながら、いずれはなんらかの形で『礼拝と音楽』を引き継ぐ情報提供の場を作っていきたいと願っています。そのためには、みなさまのご協力が不可欠です。これからもご一緒に今の時代に求められる礼拝と賛美のことをご一緒に考えていきましょう。今後みなさまに原稿を依頼させていただくかもしれませんので、その際にはぜひご協力くださいますようにお願い申し上げます。

（「礼拝と音楽」小委員会　小栗　献）

執筆分担

●主日解説

降誕前節第4主日～降誕日	小栗　献（日本基督教団神戸聖愛教会牧師）
降誕日～公現日	家山華子（日本基督教団箕面教会牧師）
降誕節3主日～降誕節第6主日	荒瀬牧彦（カンバーランド長老キリスト教会田園教会牧師）
降誕節第7主日～受難節第1主日、復活日	土肥研一（日本基督教団目白町教会牧師）
受難節2主日～受難節5主日	塚本潤一（日本基督教団北六甲教会牧師）
受難節6主日～復活日	鈴木道也（日本基督教団花巻教会牧師）

●賛美歌

降誕前節第4主日～降誕節第1主日	竹佐古真希（日本基督教団白河教会オルガニスト）
降誕節第2主日～降誕節第6主日	辻　彩乃（日本聖公会川口基督教会オルガニスト）
降誕節第7主日～復活前節第3主日	長倉　望（日本基督教団新潟教会牧師）
復活前節第2主日～復活日	寒河江健（日本基督教団十日町教会牧師）

●奏楽曲

降誕前節第4主日～降誕節第6主日	玉理照子（日本基督教団広島流川教会音楽主事）
降誕節第7主日～復活日	飯　靖子（日本基督教団霊南坂教会オルガニスト）

礼拝日課　　2026年11月22日～2027年3月28日

月日	教会暦	主題	旧約	使徒書	福音書	詩編
11月29日	降誕前節第4主日	主の来臨の希望	エレミヤ書 33:14-16	ヤコブ 5:1-11	ルカ 21:25-36	詩編 25:1-14
12月6日	降誕前節第3主日	旧約における神の言	イザヤ書 55:1-11	ローマ 15:4-13	ルカ 4:14-21	詩編 19:8-11
12月13日	降誕前節第2主日	先駆者	ゼファニヤ書 3:14-18	Ⅰテサロニケ 5:16-24	ルカ 1:5-25	詩編 85:1-14
12月20日	降誕前節第1主日	告　知	イザヤ書 11:1-10	Ⅰコリント 1:26-31	ルカ 1:26-38a	詩編 89:20-30
12月25日	降誕日(前夜)	キリストの降誕	イザヤ書 45:22-25	フィリピ 2:1-13	ヨハネ 1:1-14	詩編 98:1-9
12月25日	降誕日(日中)	キリストの降誕	ミカ書 5:1-3	テトス 2:11-15	ルカ 2:1-20	詩編 97:1-6
12月27日	降誕節第1主日	東方の学者たち	イザヤ書 61:1-11	Ⅰヨハネ 1:1-2:2	マタイ 2:1-12	詩編 21:1-8
1月3日	降誕節第2主日	神殿での奉献	サムエル記上 1:20-28	ローマ 12:1-8	ルカ 2:21-40	詩編 84:6-13
1月6日	公現日	すべての民の救い主	イザヤ書 60:1-6	エフェソ 3:2-12	マタイ 2:1-12	詩編 72:12-20
1月10日	降誕節第3主日	イエスの洗礼	ヨシュア記 3:1-17	使徒 10:34-48a	ルカ 3:15-22	詩編 104:24-30
1月17日	降誕節第4主日	最初の弟子たち	出エジプト記 18:13-27	使徒 16:(6-10)11-15	ルカ 5:1-11	詩編 101:1-8
1月24日	降誕節第5主日	教えるキリスト	箴言 3:1-8	Ⅰコリント 4:8-16	ルカ 8:4-15	詩編 147:1-11
1月31日	降誕節第6主日	いやすキリスト	ヨブ記 2:1-10	使徒 3:1-10	ルカ 5:12-26	詩編 103:1-13
2月7日	降誕節第7主日	奇跡を行うキリスト	イザヤ書 41:8-16	使徒 28:1-6	ルカ 9:10-17	詩編 46:1-12
2月10日	灰の水曜日	へりくだり	アモス書 5:6-15	ヤコブ 4:1-10	ルカ 18:1-14	詩編 10:12-18
2月14日	復活前節第6主日	荒れ野の誘惑	申命記 6:10-19	ローマ 10:8-13	ルカ 4:1-13	詩編 66:1-20
2月21日	復活前節第5主日	悪と戦うキリスト	創世記 6:11-22	Ⅰヨハネ 4:1-6	ルカ 11:14-26	詩編 140:1-8
2月28日	復活前節第4主日	受難の予告	イザヤ書 63:7-14	Ⅱテモテ 2:8-13	ルカ 9:18-27	詩編 107:1-16
3月7日	復活前節第3主日	主の変容	出エジプト記 34:29-35	Ⅱコリント 3:4-18	ルカ 9:28-36	詩編 29:1-11
3月14日	復活前節第2主日	十字架の勝利	哀歌 1:1-14	ヘブライ 5:1-10	ルカ 20:9-19	詩編 54:1-9
3月21日	棕梠の主日 復活前節第1主日	（入道行列） 十字架への道	ゼカリヤ書 9:9-10 イザヤ書 56:1-8	 ヘブライ 10:1-10	ルカ 19:28-40(41-44) ルカ (22:39-23:31) 23:32-49	 詩編 22:1-22
3月25日	洗足木曜日	主の晩餐	創世記 14:18-20	Ⅰコリント 10:16-17	ルカ 22:14-38	詩編 116:1-19
3月26日	受難日	キリストの死	イザヤ書 52:13-53:12	ヘブライ 10:11-25	ルカ 23:32-49	詩編 31:1-17
3月28日	復活日 （前夜または早朝）	キリストの復活	出エジプト記 14:15‐22	ローマ 6:3-11	ルカ 24:1-12	詩編 30:1-13
3月28日	復活日 （日中）	キリストの復活	エレミヤ書 31:1-6	Ⅰコリント 15:12-20	ヨハネ 20:1-18	詩編 30:1-6

【聖書日課の朗読箇所】

朗読箇所を省略しなければならないときは、次の文書読まれるように勧められています（次頁以降太字で提示しています）。

・降誕前節……旧約
・降誕日～復活節第7主日（昇天後主日）……福音書
・聖霊降臨日～聖霊降臨節最終主日……使徒書あるいはそれに準じる新約文書

【賛美歌欄・奏楽曲欄の歌集略記】

・番号のみは『讃美歌21』
・こ→『こどもさんびか改訂版』
・アイオナ→『みんなで輝く日が来る―アイオナ共同体賛美歌集』
・ダゥ→『神の時は　今　満ちて―カール・P・ダゥ, Jr. 賛美歌集』

【奏楽曲欄の楽譜】　28頁に掲載しています。

降誕前節第4主日　待降節第1主日

11/29 主の来臨の希望

エレミヤ33・14〜16
ヤコブ5・1〜11
ルカ21・25〜36
詩編25・1〜14

主日解説

多くの教会はアドヴェントクランツの最初のろうそくを「希望」の象徴としています。でもこの現実世界に生きるわたしたちがどんな希望を抱くことができるでしょう？

エレミヤはユダ王国が滅びへと向かう受け入れがたい状況を直視しつつ、神の希望のことばを語ります。破壊され、人も獣も住まなくなり、死体が道ばたに横たわる町。この世界はそのようなことが本当に起こる世界だという現実から目を背けてはならないと思います。でもエレミヤは希望を語り続けました。現実を見つつつ神が語る希望のことばに立ち続けることを聖書は教えます。

イエスは「いちじく」に思いを向けさせました。豊かな果実をつけるいちじくは平和の象徴でした。いちじくは「無花果」という漢字の通り花が咲きません。葉の成長だけが来たるべき時を指し示します。わたしはベランダでいちじくを育てていますがなかなか食べられる実をつけません。待たなければならないこともあります。いちじくの葉が少しずつ大きくなることは、待つことのできない「いらち」なわたしたちに時が動いていることを示します。それはろうそくに一本ずつ火を灯していくことと似ています。

この福音書が書かれる直前に起こったことはユダヤ戦争と神殿の破壊でした。神殿がなくなり宝が奪い去られたように人々の心も空っぽになる。それは「この世の終わり」のように思われたかもしれません。その上でイエスは、それでもこの世界は滅びない。わたしのことばは残る。と言われます。その「ことば」とは、まさにかつてエレミヤが語った神の「救いの約束」ではないでしょうか。

わたしたちは厳しい時代に生きていると言わざるを得ません。それでも信仰者は希望を抱くことができます。神が約束された、神ご自身が用意される未来があるからです。わたしたちは、今、思い新たにクリスマスに希望を託したいと思います。

賛美歌

243「闇は深まり」はJ.クレッパー作詞。ナチス政権下で命を落としたが、その詩は今なお各国で読まれ歌い継がれている。待降節第1主日には、229「いま来たりませ」。M.ルター作詞、プロテスタント教会最古の賛美歌の１つ。22「深き悩みより」は、同じくM.ルター作詞の詩編130編の別旋律。絶望を抱かざるを得ない昨今で全体的に低いトーンの選曲になったが、160よりはやわらかい旋律をあえて選曲。89「共にいてください」は、フランスのテゼ共同体の賛歌。149「わがたましたたえよ」は詩編103編。いちじくや全ての作物を備えて育ててくださる神を覚えて、199「ひとつぶのからし種のよう」。

奏楽曲

229「いま来たりませ」 J.Ch.H.リンク⑥
229「いま来たりませ」J.S.Bach, M.Reger ⑩
228「造りぬしなる主」D. Zimmer、玉理照子①
234「ヨルダンの岸で」T.Gieschen ①
243「闇は深まり」G.M.Gottsche ①

229　リンクの曲は冒頭からの主題をゆったりと。BachとRegerはペダル付きですがゆっくりと弾きましょう。228 楽譜①から2曲、主題旋律は円を描くようにゆったりと。234 イエス様をお迎えする喜びをかみしめて。243　伴奏としても弾けますが、前奏曲の時は１回目は静かに、２回目は壮大にと表現を変えてもいいですね。

12/6

降誕前節第3主日　待降節第2主日 /
社会事業奨励日

旧約における神の言

イザヤ55:1〜11
ローマ15:4〜13
ルカ4:14〜21
詩編19:8〜11

主日解説

第二イザヤは捕囚民たちが一つとなって故郷に帰ることを夢見たのでしょう。でも多くの人々はそれを望みませんでした。第二イザヤは預言者として苦悩します。

「私の思いは、あなたがたの思いとは異なり　私の道は、あなたがたの道とは異なる。」人が思うこと、人の生き方と、神が思うこと、神が示す生き方とは隔たっている。それが預言者としての実感であったと思います。でも預言者は、神が言葉を発したなら、その言葉は決して空しく終わることはないと語ります。雨や雪が天から地上に届くように神のことばも高い天からこの地上に降りて来て地上を潤し、豊かな実りをもたらすのです。この「言葉」は伝達のための手段や媒体ではありません。生きていて自ら走り、神の元へと帰っていく「使者」です。

イエスは安息日に会堂でイザヤ書の巻物を開きます。そこには牢獄に囚われている人々の解放、病を負う人々の回復、圧迫されている人々が自由になることが歌われていました。イエスは言われます。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」

天から降り、神のもとへ戻る神の言葉はまさにイエス・キリストご自身でした。

わたしたちも預言書を開きます。それはイエスが巻物を開いたことと同じではありません。なぜならそれはすでにイエスによって実現された言葉だからです。教会には、実現したことばを人々に届ける宣教の使命が与えられています。わたしたち自身が使者となります。この世界には孤独と悲しみの中にある人、闇を抱えて生きる人、救いを求めている人がたくさんいます。このアドヴェント、そのような人々に神の言葉がもたらされるように祈り、わたしたちもその言葉を伝える使者となれるように神の助けを求めて祈る者でありたいと思います。

賛美歌

158**「捕われの民」**は詩編126編。パレスチナとイスラエルの戦禍も覚えて祈りつつ。399**「さすらいの民よ」**は作詞・作曲共に邦人作品。多用される３連符は「さすらい」を思わせる。231**「久しく待ちにし」**　歌詞はアドヴェントの9世紀ラテン語聖歌。重たくなりすぎずに、横の流れを意識して。432**「重荷を負う者」**はイギリス伝統旋律。主の招きに従い、わたしたちは行こう。237**「聞け、荒れ野から」**はアドヴェントの賛美歌。作詞・作曲者共に英国生まれでカナダに移住している。ピアノ伴奏も似合う美しい旋律。117**「神を知らぬ者」**　詩編14編。解放の日を待ち望み、わたしたちも使者になれますように。

奏楽曲

231「久しく待ちにし」R.G.T.Velde ①
237「聞け、荒れ野から」玉理照子①
231 滑らかに、表情豊かに、単旋律聖歌の美しさを表現しましょう。237 冒頭と終わりの「荒れ野からとどく声を」はファンファーレのようにたっぷりと弾きましょう。

12/13 先駆者

降誕前節第2主日　待降節第3主日

ゼファニア書3・14〜18
Ⅰテサロニケ5・16〜24
ルカ1・5〜25
詩編85・1〜14

主日解説

イエス・キリストの降誕は、ある日突然、偶発的に起こった出来事ではありません。遠い昔から聖書を通して予告され、神の計画のもとで起こったのだというのが聖書が語ることです。そしていよいよ計画が実行に移される時が来ます。その道を備えるためにバプテスマのヨハネが世に現れます。

ザカリヤの前に現れた天使は、生まれてくる子どもの名を示します。神による命名は「使命」を与えることでもあります。天使はその子が担う使命をザカリヤに語ります。

「彼はイスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。」

この天使は後にマリアの前に現れることになるガブリエルでした。ヨハネの誕生とイエスの誕生は最初からセットで準備された計画でした。そして時が満ちて天使がザカリヤの前に現れます。

その後、語ることができなくなったザカリアは、わが身に起こったことについて考え、神の遠大な計画とそれが始まったことを知るものとなったのでしょう。子が生まれて、天使が告げた通りその子をヨハネと名付けた時、ザカリヤの口がほどけて、ザカリヤは歌います。「ほめたたえよ！」

エルサレムは長い間祭りを祝うことができませんでした。そのような中で、預言者ゼファニヤは「今神は人々のただ中にいて喜び楽しむ。」と宣言します。祝いの祭りが復活します。

わたしたちはクリスマスに喜びの歌を歌い、喜び楽しみます。それはこの方がエルサレムばかりではなくわたしたちの生きるこの世界の中におられることを信じるからです。この方が、わたしたちが祭りを祝うことができるようにしてくださったと信じるからです。「あなたの神である主はあなたのただ中におられる！」クリスマスの時、このことばをこの世界の真ん中ですべての人々に声高く語るものでありたいと思います。

賛美歌

182「ほめうた歌え」は、ザカリアの預言をうたう（作詞者ペリーは、こ68「かいばおけに眠る」の作詞・作曲も）。193「神の使者、その名ヨハネ」は、作詞・作曲者共にオランダ人。聖書に描かれているヨハネの人となりをよく表している。191「われら迎えん、救いの光」は、ヨハネ賛歌。ラテン語原詞の歌詞の初め「Ut, Re, Mi, Fa, Sol, La」はドレミのルーツ。230「『起きよ』と呼ぶ声」は、J.S.Bachのカンタータやオルガンコラール編曲でもよく知られる、教会暦の終わり（待降節前の主日）のコラール。580「新しい天と地を見たとき」は、ゼファニア書3・14−15より。『讃美歌21』最終曲で、圧倒的な力強さと感動を伴う賛美歌。

奏楽曲

182「ほめうた歌え」高浪晋一 ⑬
230「『起きよ』と呼ぶ声」 J.G.ヴァルター ⑥
240「『主イエスは近い』と」M.Archer ①
249「おさなご　主イエスよ」F.Peeters ①

182　天使のおとずれのような高音で旋律が語りかけます。230　ソプラノに出てくる旋律を生き生きと弾きましょう。240 伝統的な賛美歌に息を吹きかけるように新鮮な和音の響きが現れる編曲です。一つ一つをたっぷりと味わい、「救いが近づいている」喜びを表現しましょう。249　クリスマスの深い喜びを表した賛美歌の言葉を、Peetersが実に豊かに深く表現しております。ゆったり、じっくりと喜びをかみしめましょう。

降誕前節第1主日　待降節第4主日

12/20 告　知

イザヤ書11・1〜10
Ⅰコリント1・26〜31
ルカ1・26〜38a
詩編89・20〜30

主日解説

イザヤは平和に満ちた幻を描き出します。誰も傷つけたり殺したりしない世界、武力ではないものが支配する世界です。それは現実的にはあり得ないような世界です。妄想と言ってもよいかもしれません。でも預言者は確信したのでしょう。世界は変わらなければならない。新しくならなければならない。いつかそのような日が来るとイザヤは願いました。「その日が来れば！」はたして「その日」は来たのでしょうか？　その問いは開かれたままになりました。そして長い年月が過ぎました。

ガブリエルがマリアの前に現れたのは、ザカリアに現れた半年後でした。神はあらかじめ告知します。アポなしで行動したりはしないのです。マリアは戸惑いながらも天使のことばを受け入れます。神の計画に人は抵抗することはできないのです。神の約束は実現されなければならないからです。

マリアへの告知とマリアの賛歌がわたしたちに語ることは逆転です。貧しく名もない女性を通して神はこの世界を救い、低い者が高くされ、貧しい者が祝福され、弱い者が強くされる。この世界ではありそうになくても神にできないことはないのです。

「その日が来れば」とイザヤは語りました。イエス・キリストの誕生の知らせを受けた人々は、遠い昔の預言者のことばを思い出し、それが実現したのだと信じました。エッサイの切り株からの若枝、この世界を変える方、平和な世界を来たらせる救い主は、わたしたちが生きるこの世界のただ中にいるのだと。

わたしたちは希望と共にこの幻に向かって歩み、平和と正義と愛が支配する世界を実現するものでありたいと願います。そのために歩み出すとき、わたしたちはこの世界におられるキリストが共に歩んでくださることを知ることになるでしょう。

賛美歌

190「ヨセフのいいなずけ」は、１曲で聖誕劇もこなせるほどの名曲。作詞・作曲者共にアメリカ人。174「あがめよ、わが魂」は、マリアの賛歌を高らかに歌う英国の賛美歌。もう一曲のマニフィカト（マリアの賛歌）178「あがめます主を」は、明るく軽やかなインドネシア民謡。作詞はスリランカ人牧師、原曲には伴奏はなく、打楽器のリズム譜付き。248「エッサイの根より」は、15世紀ドイツのキャロル。ブラームスを始め、オルガン編曲も多い。主日解説「マリアの賛歌=逆転」からは、364「いのちと愛に満つ」。ブライアン・レンの詞をかみしめよう。

奏楽曲

248「エッサイの根より」L.グラープ③、Ｊ.Brahms ⑩
235「久しく待ちにし」玉理照子⑦
258「まきびとひつじを」 A.Wyton、 H.Gehrke ①
262 「聞け、天使の歌」 C.Schalk ①
248　グラープの曲はゆったりと。Brahmsは豊かに表現しましょう。235　変奏曲の形で編曲しました。ペダルの曲もありますのでレベルに合わせて。最後の曲はペダルを左手でひくと（右手は楽譜どおり）手鍵盤だけでも弾けます。まもなく来られるイエスさまをお迎えする喜びを表現しましょう。258　2曲、Gehrkeは静かな喜びを。262　手鍵盤だけで演奏可能です。Schalk独特の響きの美しさを味わいましょう。

降誕日･クリスマス（前夜）

12/25 キリストの降誕

イザヤ45・22〜25
フィリピ2・1〜13
ヨハネ1・1〜14
詩編98・1〜9

主日解説

ヨハネによる福音書の降誕物語は言「ロゴス」について語ります。言は「命」、そして「人にとっての光」と言いかえられます。そのことから、私たちは降誕祭の夜、ろうそくの火を見つめてこの世界の闇に思いを向けます。

その「言は肉となって、私たちの間に宿」ります。私たちに言のことはわからなくても、「肉」のことは嫌になるほど知っています。わたしたち自身の現実にほかならないからです。肉である私たちはどうしようもない弱さを抱えています。すぐに壊れます。年月と共に衰え、いつかは土に帰るはかないものです。さまざまな欲望に支配されています。卑しい考えや低俗な思いや感情に振り回されます。さまざまな力に縛られて､生きたいように生きることのできない惨めな存在が肉なる人間です。

ところがロゴスなるもの、命であり闇を照らす光が「肉」となったと福音書は語ります。生まれたばかりの赤ん坊は干し草が敷かれた飼い葉桶の中に置かれました。暗く寒々しい馬小屋と、家畜のための餌箱は、この世界と人間の惨めな現実を表しているようにも思えます。そのことを通して私たちは神が人間の現実を知り、その現実を受け入れられたことに希望を抱くことができます。

パウロは「わたしは土の器に宝を収めている」と言いました。この世界に来た言はわたしたちの何よりも大切な宝です。

これまで多くの信仰者がイエス・キリストの誕生を自分自身の生き方と関わることとして受け止めてきました。その誕生によって何かがかわる。自分自身が変わる。そのことを願い、そのことを祈ってきたのです。私たちもこのクリスマスにそのことを願ってみましょう。自分自身をおさなごの飼い葉桶としましょう。きっとそのことでわたしたち自身が変わるはずです。

賛美歌

53「神のみ言葉は」育ち、地に広がり、平和とよろこび満ちあふれますように。**222「キリストよ、光の主よ」**は、10世紀のモサラベ聖歌に20世紀アメリカの曲が付けられた美しい夕の歌。**241「来たりたまえわれらの主よ」**は、スイス民謡。永遠の光、希望の光であるキリストを待ち望む。**247「今こそ声あげ」**は、14世紀のドイツ・キャロル。中世のダンスのイメージで軽やかに歌おう。**368「新しい年を迎えて」**は邦人作品で年末・年始の歌だが、教会暦ではアドヴェントから新しい年、また「欠け多き土の器を主の前に全て捧げ」るためにもこの曲をご提案する。
ほかには **259「いそぎ来たれ、主にある民」**、**261「もろびとこぞりて」**。

奏楽曲

259「いそぎ来たれ、主にある民」R.Gower、玉理照子①
261「もろびとこぞりて」H.Gehrke ①
53 「神のみ言葉は」C.Callahan、J.Vyhanek ②（1/24を参照ください）
259 Gowerの曲は前半の8分音符の絶え間ない躍動、後半の和音の豊かさが特徴です。玉理照子の編曲は和音をたっぷり保って弾きましょう。261　Gehrkeの曲は8分の６拍子に乗って喜びを表現しましょう。

降誕日･クリスマス(日中)

12/25 キリストの降誕

ミカ5・1〜3
テトス2・11〜15
ルカ2・1〜20
詩編97・1〜6

主日解説

暗い静かな夜、一組のカップルが泊まる場所を探し廻っています。女性のお腹には赤ちゃんがいます。しかし、泊まる場所が見つからないままに出産の時が来てしまいました。女性は家畜小屋で赤ちゃんを出産しました。飼い葉桶に寝かされた赤ちゃんの周りは、喜びに包まれています。

一方、この喜びとは対照的な空気が、社会に漂っています。ローマの皇帝アウグストゥスが、全領土の住民に「住民登録をせよ」と勅令を下しました。税金を払う人の数を把握し、国の経済力を知るため、また兵士の数を把握するために。いつの世も、一部の権力者によって、多くの人の命は軽んじられ、犠牲を強いられています。しかし、そんな世界に逆行して、静かにキリストはお生まれになったのです。世界の最も暗い場所に、そしてわたしたちの心の暗闇に、光を灯すために。

この喜びの知らせは、社会の片隅にいた羊飼いたちに最初に届けられました。人間を超える圧倒的な力の前に、羊飼いたちは、ただ恐れることしかできません。「今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」（11節）。救いがないと思われていた人たちに、真っ先に救いが届けられた瞬間です。彼らは、飼い葉桶に寝ている赤ちゃんを見つけ、神様を賛美する者となりました。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」（14節）。天使の賛美に、羊飼いの賛美が続きます。すべての人が、この賛美の輪に招かれています。

キリストの平和は、人間が考える平和を越えています。この世界の最も暗いところにこそ、キリストの平和が届くことを願い、主の御心を祈り求めつつ、平和を築く者となることができればと願います。

賛美歌

こ34「キリストの平和」は、シンプルな歌詞と旋律だからこそわたしたちの中にしみ渡って来る。英訳もされている。244「キリストは明日おいでになる」は、アドヴェント最後の主日のために書かれた賛美歌。作詞はオランダのカーンで、ヒム・エクスプロージョンにも携わった。273「この聖き夜に」は、243と同じくJ.クレッパー作詞。イエスの降誕は十字架へと続く道であることをストレートに描く。443「冠も天の座も」は、イエスの降誕から十字架、天国までを歌い上げる。251「羊飼い群れを守る夜に」は、会衆が二手に分かれて1、2、5節と3、4、6節の天使のお告げ部分を交互に歌うなど一工夫してもよいだろう。

奏楽曲

こ34「『キリストのへいわ』による祈りⅠ」玉理照子⑦
244「キリストは明日おいでになる」飯　靖子①
256「まぶねのかたえに」M.Weyer／飯　靖子①
265　C.Schalk「天なる神には」①
こ34　ペダル付きですがゆっくりと弾きましょう。244　賛美歌の言葉にある深い喜びを表現しましょう。256　Weyerの曲、クリスマスに静かに弾くのもいいですね。飯靖子編曲はレガートで豊かに弾きましょう。265　平和の主イエス・キリストのご降誕の喜びを8分の６拍子に乗って。

12/27

降誕節第1主日

東方の学者たち

イザヤ61・1〜11
Ⅰヨハネ1・1〜2・2
マタイ2・1〜12
詩編21・1〜8

主日解説

時々、子どもの鋭い質問に、戸惑ってしまうことがあります。大人が作りあげた社会の仕組みを、子どもたちに上手く説明できないとしたら、それは考え直す必要があるのかもしれません。

東の国の博士たちは、珍しい星を見つけたので、ユダヤ人から聞いていたユダヤ人の王がお生まれになったのだと知り、会いに来ました。自分こそがユダヤの王だと自負していたヘロデは、新しい王が誕生したという博士たちの言葉に不安を抱き、密かにその子を殺そうと企みます。そして、お抱えの学者たちに、救い主が生まれることになっている場所を調べさせます。こうしてヘロデは博士たちに、ベツレヘムへ行くよう伝え、見つかったら戻って来て知らせてくれるように頼みました。

博士たちがベツレヘムへ出発すると、星が先立って進み、幼子のいる場所の上で止まりました。「この星は、確かに自分たちを導いてくれている」。そう思うと、救い主に会える喜びでいっぱいになりました。そして、家の中にいるマリアと幼子に出会った時、博士たちはひれ伏して礼拝しました。

わたしたちの人生には、喜びの時、楽しい時だけでなく、苦しみの中に置かれる時、不安や悩みを抱える時があります。しかし、どんな時にも心を沈めて、暗闇の中の光である主イエスに頭を下げて礼拝することを大切にしたいと願います。

主イエスを礼拝し、喜びに満たされた博士たちは、夢で「ヘロデのところへ帰るな」という神様の言葉を聴いたので、ヘロデのところへは戻らず、別の道を通って帰って行きました。何にも縛られずに、ただ神様の言葉に聞き、導かれて一歩一歩を歩むことができればと願うものです。それがどんなに困難な道だとしても、主イエスが共にいてくださる喜びを賛美し続けることができますように。

賛美歌

271「喜びはむねに」は、スウェーデンの牧師ロセニウス作詞とフィンランドのシベリウス作曲による北欧の賛美歌。クリスマスの喜びを静かに歌い上げる。269「飼いばおけにすやすやと」は、こどもの視点で描かれた愛らしい賛美歌。こ68「飼い葉桶にねむる」は既出182の作詞者ペリーの作詞・作曲。アクティヴで能動的なこどもさんびか。278「暗き闇に星光り」は、英国国教会の作詞・作曲者による。256「まぶねのかたえに」は、J.S.Bachの作曲（バスの動きはバロック時代の通奏低音そのもの）とドイツの偉大な詩人で牧師パウル・ゲルハルト作詞による名曲。550「大地よ、星々よ」は〔学校〕の項目に入っているが、詩編148でいつでも相応しい。

奏楽曲

269「飼い葉おけにすやすやと」C.Callahan ①
278「暗き闇に星光り」玉理照子①
271「喜びはむねに」飯　靖子①
269　後半は賛美歌の伴奏としても使えます。278　旋律は前半右手、後半はいろいろな所に出てきます。探してみてください。たっぷりと。271　後半は歌詞からのインスピレーションで転調しています。

1/3

降誕節第2主日

神殿での奉献

サムエル上1・20〜28
ローマ12・1〜8
ルカ2・21〜40
詩編84・6〜13

主日解説

新年最初の日、空気が澄んで、きれいな空を見るのが私は好きです。心が洗われるようです。忙しいときや、悩みを抱えているときは、心の目が曇ってしまうこともありますが、この一年、澄みきった空のように、澄んだ目で周りを見ることができればと願います。

マリアとヨセフは幼子イエスを連れて神殿へ行きました。生まれてから40日の清めの期間が過ぎて、幼子を主に献げるためです。それは、ユダヤ人の家庭に最初に生まれた子どもは、誰もがしていたことでした。他の子とイエスに何の違いもありません。

しかし、その赤ちゃんイエスを見た時に、神様の救いの出来事だと気がついた人が二人いました。シメオンという人は、すでに高齢になっていましたが、いつも神様に祈り、イスラエルの民が待ち望んでいる救い主が現れるのを待っていました。そのシメオンが神殿の境内で幼子イエスに出会い、腕に抱いた時、確信をもって主を賛美しました。「わたしはこの目であなたの救いを見た」と。アンナという女預言者も、夫に先立たれてから84歳になるまでずっと神様と共にいて、昼も夜も祈っていました。アンナも幼子イエスを見て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々に、喜びを伝えました。

この二人は、祈りと聖霊の働きによって、救いを見る目が与えられていました。わたしたちはすぐに、自分の思いや心配や悩みで心が支配されてしまうものですが、主イエスの言葉と存在によって心を刺し貫かれ、心の思いがあらわにされて、すべてを神様のもとにゆだねることができればと願います。そして、暗闇の中にあっても神様が働いてくださることを見る目を与えられたいと願います。新しい一年の歩みの上に、思いを越える聖霊の導きが豊かにありますように。

賛美歌

368「新しい年を迎えて」　新年を迎え、気持ちも新たにこの歌を歌いたい。新しい年への誓いとともに、神さまを賛美して。
180「去らせたまえ」　ルカ2・29-32のシメオンの賛歌に基づいている。
282「幼い主の宮もうでは」　幼子イエスが神殿にささげられた出来事やシメオンが救い主を見いだした喜びが歌われ、4節で私たちの祈りへと展開される。
140「み神のすまいは」　BROTHER JAMES' AIR の名で広く愛唱されている美しい賛美歌。詩編84に基づく。

奏楽曲

180「去らせたまえ」W.フォーゲル⑤／J.S.バッハ（主なる神よ今天を開き）⑨
152「みめぐみふかき主に」J.W.Kerr,　G.M.Gottsche②
141「主よ、わが助けよ」 C.Callahan②
180 左手旋律、自由に喜びを持って表現しましょう。バッハのコラールもシメオンの賛歌として喜びを持って天に上るシメオンの姿を表しています。**152**　Kerrの曲はシンプルな編曲を華やかに。Gottscheのこの曲は何とバッハのファンタジート長調のイメージに152番の旋律を紛れ込ませています。華やかに新年に弾きたい曲です。**141**も壮大に。

1/6

公現日

すべての民の救い主

イザヤ60・1〜6
エフェソ3・2〜12
マタイ2・1〜12
詩編72・12〜20

主日解説

12月25日降誕日から１月６日公現日までをクリスマスシーズンと定められています。そのクリスマスのクライマックスである公現日は、キリストの光が、すべての人に与えられることをお祝いする日です。

イザヤ書の預言は、暗闇の中にいて、希望が見えない人々に向かって「起きよ、光を放て」（1節）と呼びかけます。なぜなら、「あなたの光が来て　主の栄光があなたの上に昇った」（同上）からです。大きな困難や、先の見えない不安の中にいる時、暗闇に心がふさがれてしまいます。神様なんていないのではないかと思ってしまいます。しかし、目の前に光が見えない時にこそ、「あなたの上に光が輝く」という言葉を信じて立ち上がり、前へと進むように励まされるのです。

暗闇の中の光としてお生まれになった主イエスは、生涯の最後に十字架に架けられて死なれます。幼子を胸に抱いて喜びに満たされた母マリアは、後に自分の子どもの悲惨な死に立ち会わなければならない苦しみを背負います。しかし、暗闇しか見えないところにも、光は存在します。主イエスは復活され、死の暗闇を光へと変えてくださいました。この光が届かない暗闇はありません。この光は、すべての人を照らす光です。

救い主の誕生をお祝いするために、東の国から博士たちが贈り物をたずさえてやってきました。「国々はあなたの光に向かって歩み……」（3節）と言われていた通りです。この世界の暗闇がどんなに深くても、そこに主イエスの復活の光が輝くことを信じる共同体のもとに、すべての人は光を見るのです。主イエスの救いの光には限界がありません。福音宣教の困難な中にあっても、そこにこそ主イエスの栄光が輝くことに信頼して、あきらめずにキリストの光を灯し続けたいと願います。すべての人を照らす真の光を、心から賛美し続けましょう。

賛美歌

276「あかつきの空の美しい星よ」　“コラールの女王”と称されるこの賛美歌は、フィリップ・ニコライによるもの。まことの光であるイエスの栄光が歌われる。
278「暗き闇に星光り」　輝く星に救い主のもとへの導きを願い、何よりも神が喜ばれるのは私たちがささげる賛美、祈りであることが歌われる。
279「ふるさとを離れて遠く」　プエルトリコのキャロル。印象的なハバネラのリズムにのせて、生き生きと歌いたい。
568「朝日はのぼり」　冒頭の「朝日はのぼり」という歌詞で「光」が印象付けられ、6節の「まことの神の子」「世界を救う」という力強い宣言へと展開されていく。

奏楽曲

276「あかつきの空の美しい星よ」D.ブクステフーデ⑥、H.ボルネフェルト③、G.T.マイルズ ⑪
278「暗き闇に星光り」玉理照子①（12/27にも記載）
276　**ブクステフーデ**　８分の６拍子に乗って旋律を歌いましょう。**ボルネフェルト**　大きな流れを感じましょう。**マイルズ**　左手旋律に対して右手の16分音符はまさに星のように華やかに上下します。

1/10

降誕節第3主日　公現後第1主日

イエスの洗礼

ヨシュア3・1〜17
使徒10・34〜48a
ルカ3・15〜22
詩編104・24〜30

主日解説

ヨハネは自らの授ける洗礼は準備に過ぎないと明言し、これから来られる方が「聖霊と火で洗礼をお授けになる」と告げた。しかしイエスは、ヨハネが予想したのとは異なり、恐ろしい炎のように新種の洗礼を授けたのではなく、悔い改めの洗礼をご自身で受けられた。我々の洗礼の原点は、イエス御自身が受けた洗礼である。ルカの記述は短く簡潔だが、中身は重い。イエスは洗礼を受ける民衆――ルカはここで群衆（オクロス）でなく民衆（ラオス）を用いる――に加わり、悔い改める人々の列に加わって、洗礼を「受ける」ことから始める。その背中が、「あなたがたも、ここから始めなさい」と言われているように。

22節は、イエスという方の秘められた正体が啓示された瞬間を伝えている。神に愛された子、神の御旨を行う御子という正体が洗礼において露わとされた。これは「イエスとは誰か」を知る重要な瞬間であるが、それだけには留まらない。「洗礼において我々は何者とされるのか」が明示されたのだ。イエスは民衆と連帯し、御自分の聖なる正体を我々にもくださるからである。この私が洗礼を受けたあの時、聖霊が鳩のように私にくだり、天から「これは私の愛する子」という声が響いていたのだ。

洗礼は罪人である古い自分を水で溺死させ、新しい人間としての誕生をもたらす。「洗礼は入学式」という言葉は半分だけあたっている。入学式は学校に入る時に必要だが、過ぎてしまえば過去となる。しかし洗礼は過去の通過点でなく、その後永遠に続く不変のアイデンティティを作るもの、作り続けるものだ。イエスの洗礼ゆえに、「私の愛する子」という声が天から響き、聖霊の鳩が自分の上にとまるという新しい私を、今も作っているのだ。

【礼拝準備のための補足】　典礼色を用いる教会では、この主日は「白」となります。

賛美歌

69「神はそのひとり子を」　洗礼によって、罪を赦され、新たに生かされている恵みを胸に刻みながら歌いたい。

283「深い愛により」　2節でイエスの洗礼が歌われる。福音を伝える公生涯の始まりを、この歌を通して思い起こしたい。

277「罪なき神の子」　イエスの洗礼、鳩のようにくだる聖霊、そして「愛するわが子よ」という天からの声が響く。まるで絵画のような印象を受ける賛美歌。5節では「われらもいでゆかん」と決意を表明する。

475「あめなるよろこび」　私たちを新たに造りかえてくださいと祈り求めつつ、礼拝の終わりに歌いたい。

奏楽曲

69「神はそのひとり子を」玉理照子⑦／「『神はそのひとり子を』による入堂曲」玉理照子⑧
283「深い愛により」J.ダンスタブル③
476「あめなるよろこび」 R.G.T.Velde ⑫
69　主が招いて下さる喜びを歌いましょう。283　華やかな音色で。476　右手の動きの中に旋律が隠れています。Veldeの魅力的な和音を大切に味わいましょう。

1/17

降誕節第4主日　公現後第2主日

最初の弟子たち

出エジプト18・13〜27
使徒16・(6〜10)11〜15
ルカ5・1〜11
詩編101・1〜8

主日解説

一人ですべてを抱えているモーセにしゅうとが助言し、助け手たちを任命し、小さな問題を分担させたという出エジプト記の記事が旧約の箇所であるのは興味深い。神の業には、参与する人間たちが求められる。福音書が告げるのは、イエスが一人で神の国の宣教を行ったのでなく、宣教の初期に弟子を呼び集めたということである。そしてその召しの出来事は、今を生きる現代のキリスト者に対しても、神の御計画への参与を求める呼び声となる。

ルカ福音書によると、シモンは既にイエスを知っていた（4・38〜39）。しかし彼は「神の言葉を聞こうとして押し寄せて来た」群衆の中にはいない。夜通し漁をして何も獲れなかった末に、ただ網を洗っている。イエスに「沖へ漕ぎ出して漁をしなさい」と命じられた時、彼は不漁の現実を述べるが、「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答える。これは受胎告知の時のマリアのような信仰の応答だろうか。偉い人には逆らわないのが得策という苦労人の知恵による表面的な服従だったのではないか。だから、網が破れるほどの大漁であった時、彼はイエスの足元にひれ伏し、罪を告白したのだ。自らのうちにある無関心と冷笑、苛酷な現実に支配されている心をすべて見抜き、それなのに自分を漁へと招いたこの方はどなたなのか！

「沖へ漕ぎ出せ」は、直訳すれば「深いところへ向かえ」である。イエスに従っていくことは深みへと進んでいくことである。イエスは私たちを用いてくださる。

ガリラヤの搾取の構造の中で疲れきっているシモンよ、あなたの人生はこのまま終わるのではない。これからが本番だ。「深いところ」へ向かっていこう。それは人間が苦しんでいるところだ。救いを求め、解放を求めて人がもがいているところだ。あなたは人間をとる漁師になるのだ。人間が人間らしく生きられるよう、人間を取り戻す働きをするのだ。

賛美歌

516「主の招く声が」　私たちを招いてくださる主のみ声を聞き、弟子たちのように応えていくことができますようにと祈りを込めて。
290「おどり出る姿で」　2節で、ペトロたちがすべてを捨ててイエスに従った物語が歌われる。軽快なリズムで元気に歌いたい。
512「主よ、献げます」　いのち、手足、声、愛、すべてを主にささげ、私をどうぞ用いてくださいと願い求める賛美歌。
507「主に従うことは」　主に従って歩む喜びを、礼拝の終わりに高らかに歌いたい。私たちの日々の生活へ、遣わされる場所へ、主がともに歩んでくださることを感謝しつつ。

奏楽曲

516「主の招く声が」高浪晋一⑬
290「おどり出る姿で」R.S. Widmar、C.Callahan ①、R.G.te.Velde ⑫
90「主よ、来たり、祝したまえ」玉理照子⑦、玉理照子②
91「神の恵みゆたかに受け」 W.Held、R.Proulx ②
516　二声の響きの美しさを大切に。290　Widmar主題がいろいろな表情で出てきます。Callahanの曲はゆったりと弾きましょう。Veldeの曲は簡単なペダル付きです。90　最初⑦で編曲した曲を拡大したのが楽譜②です。派遣の曲として華やかに。91　この2曲は対照的な雰囲気で派遣の喜びを表現しています。Heldの曲は常に動く８分音符がこれからの歩みを示し、Proulxの曲は豊かな和音が魅力です。

1/24

降誕節第5主日　公現後第3主日

教えるキリスト

箴言3・1〜8
Ⅰコリント4・8〜16
ルカ8・4〜15
詩編147・1〜11

主日解説

この譬えにはマルコとルカで細部にいくつか違いがある。マルコは「30倍、60倍、100倍の実」と種の目覚ましい成長を表現し、それへの驚きが重要となる。ルカでは「人に踏みつけられ」や、御言葉を「心から」奪い去る等の付加があり、伝道への妨害の厳しさ、試練の厳しさが強調される。マルコの「その他いろいろな欲望」を、ルカは「快楽」とする。そして、より重要な違いは、15節「良い地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」という箇所である。

種が育つ土地の要素とは、立派な善い心で聞くことあり、よく守ることであり、忍耐して実を結ぶことである。忍耐という語（動詞形だとヒュポメノー）は、「下で」と「とどまる」からなる。ずしりと重いことがあるが、そのもとにとどまるのが忍耐である。「神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです。」（ヘブライ10・36）

イエスはたびたび農業を題材として語られた。種蒔きの後には「待つ」時間が来る。それはさっと簡単に終わる時ではなく、苦難が伴う。しかしその苦難によって忍耐が身につき、その忍耐が品格（練達）を練り上げ、それが希望の土台となる。その希望は失望に終わることがない（ローマ5・3〜5）。

我々がよく使う「結果」と「結実」。結実は大抵良いことに用いるが、結果は悪いことや望まないことにも用いる。「最悪の結果」を恐れて、腰が引ける心がある。しかし、信仰者は知っている。結果は神の御手の中にある。神が責任を負ってくださる。種まく人イエスがそこいら中に蒔かれた種は、「百倍の実を結ぶ」種だ。そのことに信頼しよう。妨害はある。心迷わせるものは多い。しかし、種への信頼ゆえに忍耐できる。それが信仰という農業の素晴らしさだ。ほんの少しでも良い土地があれば、それが種の力をあらわす。

賛美歌

57「ガリラヤの風かおる丘で」　爽やかなメロディーにのせて「みことばをわたしにも聞かせてください」と歌う。礼拝の始めに味わいたい。

195「まかれた種」　「種を蒔く人」のたとえに基づく。全節の最後に「良い大地」と歌われる。100倍の実を結ぶ良い大地となれるように祈りを込めて。

53「神のみ言葉は」　4節「み言葉は育ち」「広がり」「平和とよろこび　満ちあふれる」、そのような世界になることを、今、願わずにはいられない。

510「主よ、終わりまで」　3節で「お語りください、主よ、みことば」と歌う。人生の終わりまで主に仕え、従うことを力強く宣言する賛美歌。

奏楽曲

53「神のみ言葉は」C.Callahan,　J.Vyhanek②
50「みことばもて主よ」J.W.Kerr②

53　Callahanの曲は、Setting１から４まで旋律がどこに隠れているか考えて弾きましょう。Vyhanekの編曲は左手旋律を特徴的な音色でしっかりと。

50　シンプルなアレンジですが旋律をたっぷりと表現しましょう。

1/31

降誕節第6主日　公現後第4主日
公現日

いやすキリスト

ヨブ2・1〜10
使徒3・1〜10
ルカ5・12〜26
詩編103・1〜13

主日解説

全身規定の病を患っている人がイエスにひれ伏して、清くしてほしいと願った。接近禁止という壁を打ち破るこの人に、イエスも壁を打ち破る。手を差し伸べ、触れる。そして言う。「私は望む。清くなれ」。新共同訳が「よろしい。清くなれ」と、殿様が臣下に命じるような口調で訳していたのを、聖書協会共同訳は、イエスの思いを感じさせる「私は望む」と訳した。

それに続く場面では、一人の体の麻痺した人が床に乗せて運ばれてくる。運んできた男たちは屋根を打ち破って、彼をイエスの前に置く。イエスはその信仰に応え、また別の意味での厚い壁を打ち破る。「人よ、あなたの罪は赦された」という宣言は、イエス批判者たちに激震をもたらす。罪の赦しとは、口で簡単に言えばできるというものではない。重い代償が求められる。この歩みの先に自身の死が待つ。しかし、体の癒しより先にこのことを言わねばならない。

NHK朝ドラ『風、薫る』を見ていて、村松静子という日本最初の開業ナースとなった方のインタビュー記事を思い出した。彼女は、患者を訪ねてもすぐ血圧を測ったりしない。「血圧計がない、聴診器がないという環境でも、私たちは患者さんの胸に手を当てて肺の状態を感じるでしょ。背中をたたいたり、さすったりするでしょ」と先輩に教えられた。五感で患者の状況を把握する力が大事なのだ、と彼女は強調する。この箇所におけるイエスは、まさにその力を示されたのではないか。最も深くまで人を見て、今その人が、最も必要としているものを差し出す。それが罪の赦しの宣言であった。そのためにどれほど反対者たちが怒り狂い、自分に殺意を抱こうとも、この人のために罪の赦しを宣言しなければならない。そして、その言葉が自分のうちから溢れてくる真に力のあるものであることを示すために、「起きて床を担ぎ、家に帰りなさい」とその人に言う。その人は、今度は自分の信仰をもって、その言葉に応答し、起き上がり、神を賛美しながら家に帰っていった。

賛美歌

433「あるがままわれを」　病、悩み、困難のうちにある私たちの、そのありのままを主に委ねる。主への絶対的な信頼が歌われる賛美歌。

446「主が手をとって起こせば」　使徒言行録3・6の「立ち上がり、歩きなさい」というペトロの言葉が1節に表れている。全節の「これぞ神のみわざ」という言葉は高音部で展開され、力強さが感じられる。

536「み恵みを受けた今は」　イエスによって病を癒され、赦された人が、喜びあふれて神を賛美したように、私たちも主から受けた恵みに感謝し、高らかに歌いたい。

14「たたえよ、王なるわれらの神を」「ハレルヤ、ハレルヤ、神をたたえよ」と歌い、勇気と希望を胸に抱いて礼拝堂から歩み出したい。

奏楽曲

14「たたえよ、王なるわれらの神を」J.L.アーダム④、R.G.T.Velde ⑫
453「何ひとつ持たないで」玉理照子⑦
227「主の真理は」F.Lubrich ②
286「ほめたたえよ、われらの主を」P.Moore ①

14　アーダムの曲は音色も音量も豊かに。Veldeの曲はペダル初心者用。453 ペダル付きの曲ですがゆっくり弾きましょう。力を抜いてすべてを神様に委ねる感じで。227　主のもとで小さい私たち、主の大きさをたたえましょう。286　主の恵みを与えられる喜びをたっぷりと表現しましょう。

2/7

降誕節第7主日　公現後第5主日

奇跡を行うキリスト

イザヤ41・8〜16
使徒28・1〜6
ルカ9・10〜17
詩編46・1〜12

主日解説

私たちは今朝、「主の業を仰ぎ見よ」（詩編46・9）、「静まれ、私こそが神であると知れ」（11節）と命じられています。そこに明らかにされるのは、「地の果てまで、戦いをやめさせ　弓を砕き、槍を折り、戦車を焼き払われる」（10節）という主の驚くべき御業です。

今日の福音書が示すのも、同じ神のお姿です。言わずと知れた五千人への給食の物語。「飼い主のいない羊のような有様」（マルコ6・34）であった大群衆を憐れみ、イエスは二匹の魚と五つのパンで五千人を満腹にする今日の奇跡をなさいました。

地の果てまで戦いをやめさせる父なる神と、この地上を生きて五千人を満腹にした子なる神。降誕節最後の日曜日である今日、私たちは、神の前に静まり、御業を仰ぎ見て、御子キリストがまさにそのような平和の神、給食の神として、この地上で今も生きて働いていることを思い起こします。

さらにルカ9・13に注目しましょう。日が暮れて来たので群衆を解散させるべきだと進言する弟子たちに対して、イエスは言われました。「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」。イエスはすべてを一人でやってしまうのでなく、この驚くべき御業に加わる者を求めてくださるのです。

「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」。原文を見ると、「あなたがた」が強調されています。ギリシャ語では、代名詞がなくても動詞の主語を表せます。でもここではあえて二人称複数の代名詞を明記して、「他の誰でもない、あなたがたが」と強調しています。

新共同訳では「あながたが彼らに食べ物を与えなさい」でしたが、聖書協会共同訳では「あなたがたの手で」となりました（口語訳も同様）。「の手で」という原文にはない言葉を加えて、この強調を表現したのでしょう。

この世界に平和を実現し、疲れ果てた人々に今日の食事を配るために、御子が私たちを招いています。「あなたがたの手で」と。

賛美歌

56「主よ、いのちのパンをさき」　イエスが天を仰ぎ、賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちにわたして群衆に配らせたパンが、わたしたちにも与えられることを祈り求める賛美として。説教の前に、今日のみ言葉を祈り求める歌として位置付けることもできるのではないでしょうか。

419「さあ、共に生きよう」　苦しみ、悩みの中で、イエスのもとに駆け付けた人たちと共に生き、パンを分かち合われたイエスとの出会いと希望を歌います。

564「イェスは委ねられる」　3節を派遣賛美として。地の果てまで戦いをやめさせ平和を求める神さまを証するために派遣されるわたしたちに、聖霊の力を祈り求めます。

奏楽曲

56「主よ,いのちのパンをさき」北澤　憩④

讃美歌56番の旋律がソプラノにとびとびに現れます。まず、その部分をマークしてから弾き始めてください。賛美歌の前奏曲はその賛美歌の旋律がどこかで弾かれています。それを探しだすことがとても楽しいですし、次にその旋律を礼拝に参加している方々に気づいてただけるように弾くことがポイントです。

75「今、装いせよ」J.G.Walther ④

バッハと同じ時代に活躍した Ｊ．Ｇ．ヴァルターのコラール前奏曲です。やはりソプラノに賛美歌（コラール）旋律が起かれているのですが、ブラームスの作品と違い少し装飾されています。その装飾の部分がしたの動きに現れることもあり、とても美しい前奏曲です。

2/10

灰の水曜日

へりくだり

アモス5・6〜15
ヤコブ4・1〜10
ルカ18・1〜14
詩編10・12〜18

主日解説

受難節の始まりの「灰の水曜日」。この日、礼拝に集った人々の額に、灰で十字を描く儀式を行う教会もあります。

この「灰」にはどういう意味があるのでしょう。創世記で神はアダムに向かって「あなたは塵だから、塵に帰る」（3・19）と語りました。「塵」は人間の原材料です（2・7）。つまり創世記の創造物語は、塵（「灰」とも訳せます）から創られた人間が、死んで塵に帰っていくという人間のはかなさを伝えています。教会は、受難節の始まりにあたり、私たちが「塵」であることを思い出し、神の前にへりくだることを呼びかけるのです。

今日ルカが伝える「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」（18・9）は、へりくだりの正反対を歩む人です。「うぬぼれて」と訳された言葉は、直訳すれば「自分を信じ」。岩波訳は「自分は義人であるとして自ら恃（たの）み」です。

対照的なのが徴税人です。彼は自らを恃むことができません。「徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人の私を憐れんでください』」（13節）。

私は、大学生のとき、初めてカトリック教会のミサに出席しました。ミサの初め、罪の告白のときに、こぶしで胸を打つ動作をしている方がいて、とても心に残りました。これは、悪い思いや罪が宿る自分の心を打つ動作であると教えられました（宮越俊光『シンボルで味わう典礼・礼拝』）。

私は罪人である。胸を打っておのれが塵であることを自覚する者は、もはや自分を信じることができず、神に憐れみを求めるほかないのです。あのやもめ（3節）も自分を当てにすることができず、昼も夜も神に叫び求め続けました。そのような態度が「信仰」（8節）と呼ばれています。

今日私たちはこのやもめに倣って神に近づくように招かれています。「神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます」（ヤコブ4・8）。

賛美歌

444「気づかせてください」 作詞者の木原葉子さんが1993年に神学校のプログラムでフィリピンを訪れたときに与えられた出会いと、日本人がしてきたこと、していることへの気づきによって書かれました。自らの罪を深く見つめ、隣人ともう一度共に歩む未来のために、和解と平和の神の助けを祈ります。**480「新しい時をめざし」** サンバのリズムのブラジル賛美歌。苦しみ嘆きをもたらす社会的不正義の中にあっても、共に手を携えて神と共に歩もうと呼びかけます。受難節を大切に過ごし、イースターを迎えることから「新しい時」が始まります。**563「ここに私はいます」** ドイツの版画家アイヘンバークの作品「炊き出しの列にならぶキリスト」を想起させられる賛美歌です。主の問いかけと招きが響きます（**516「主の招く声が」**）。

奏楽曲

563「ここに私はいます」玉理照子⑦
ペダルと2つの鍵盤のために書かれた前奏曲。上声部に賛美歌の旋律が置かれ、中声部はアルペジオ（分散和音）。上声部の賛美歌の旋律は少し特徴のある音色で中声部、ペダルは賛美歌のメロディーを支えるような音色を選んでみてください。

516「主の招く声が」蒔田尚昊⑮
「ガリラヤの風かおる丘で」の作者蒔田尚昊氏の作品です。８小節のモダンな前奏に続き、「主の招く声が〜」の賛美歌のワンフレーズと同じ雰囲気を持った間奏をはさんで賛美歌のメロディーが書かれています。後奏はのびやかに高音に上り、ピアニシモで終わるなだらかな美しい前奏曲です。

2/14

復活前節第6主日　受難節第1主日　四旬節第1主日

荒れ野の誘惑

申命記6・10〜19
ローマ10・8〜13
ルカ4・1〜13
詩編66・1〜20

主日解説

私自身の献身を考え始めた時、牧師や神父たちの献身の証しをいくつも読みました。今も鮮明に覚えているひとつは、『主の招く声が』という本に掲載された英隆（はなふさ）一朗神父の証言です。イエスの貧しさに倣いたいと願って自分は神父になった、と記されていました。

この「貧しさ」は金銭的なことだけではないはずです。主がすべてを与えてくださると信じ、何ひとつ持たないで主の前に立つ（『讃美歌21』453番）。この貧しさのことだと思いました。

申命記は、豊かさの中に誘惑があることを警告します。満ち足りた家、豊富な食料を得た時に「エジプトの地、奴隷の家からあなたを導き出した主を忘れないように注意しなさい」（6・12）。豊かさの中で、もはや主に頼る必要はないと考え、主を忘れてしまうのです。

イエスが荒れ野で受けた誘惑もこれでした。サタンはイエスに豊かさを保証し、神に頼ることから引き離そうとします。しかしイエスは、誘惑をすべて退けました。

この誘惑物語の冒頭で、「イエスは霊に満ちて……霊によって荒れ野に導かれ」（4・1）と聖霊の伴いを強調していることは大切です。申命記には「あなたの中におられる、あなたの神、主は妬む神である」（6・15）とありました。私たちが豊かさの中で神を忘れる時、私の中にいる神が、神以外のものに心奪われている私を妬んでくださるのです。そしてそのお方が聖霊として、私たちを荒れ野へと導いてくださる。

荒れ野。それは好んで行く場所ではないでしょう（ヨハネ21・18）。この荒れ野で私たちは、自分が頼りにしているものや、誇りとしているものをはぎ取られて、自分の貧しさを突き付けられます。誘惑にもあうでしょう。でも同時に、そこで聖霊の助けを得て、真実に「主の名を呼び求める者」（ローマ10・13）になっていくのではないか。

今日は受難節第１主日。この受難節の時、私たちも導かれる所で、イエスの貧しさに倣う歩みを形作っていきたいのです。

賛美歌

453「何一つ持たないで」信仰告白の賛美。荒れ野の誘惑の物語と重ねて歌うと、イエスの切なる祈りの賛美として響いてくるようです。**511「光と闇とが」**　この世界の対立や葛藤を「光と闇」として描き、光に固くたつようにと歌います。2節「悪魔の誘惑激しい時も」の歌詞も。**443「冠も天の座も」**権力も名声も豊かさもサタンの誘惑として退けたキリストが、わたしたちの内に宿ってくださることを祈り求めます。**486「飢えている人と」**　荒れ野の誘惑で石をパンに変えることを退け、わずかなパンを分かち合って生きる道を歩まれた主の後にわたしたちも続こう、と歌います。

奏楽曲

453「何ひとつ持たないで」B.M.Huijbers ⑮
賛美歌の8小節目、16小節目に使われているリズムのゼクエンツ（反復進行）から始まり、６小節から賛美歌の旋律が上声部で、19小節から低声部で、29小節目から再び上声部で弾かれます。曲全体に使われているゼクエンツが印象深い前奏曲です。

486「飢えている人と」北澤　憩⑮
拍子、小節線のない新しい賛美歌であることから、前奏曲も新しいスタイルで書かれていると思われます。二重線で分かれている5つの小節があり、始めと終わりが同じ、2つ目と4つ目の小節の低声部に賛美歌の旋律が置かれています。3つ目の大きな小節では2、4の右手で弾かれるハーモニーに左手が加わり新しい響きを作っています。書かれているリズムにあまりとらわれないで自由さを表現してください。

2/21

復活前節第5主日　受難節第2主日　四旬節第2主日

悪と戦うキリスト

創世記6・11〜22
Ⅰヨハネ4・1〜6
ルカ11・14〜26
詩編140・１〜8

主日解説

復活前第5主日は、受難へ向かうイエスの歩みを見つめつつ、人を損なう力にキリストがどう対峙したかを問う主日です。本日の短いたとえは、悪霊追放をめぐり、イエスが悪霊の頭によって悪霊を追い出している、と非難された論争の中に置かれています。したがって、これは悪霊世界の仕組みについての説明というより、解放の出来事を悪と呼び替える者たちへの応答です。

汚れた霊は人から出た後、休み場を求めて荒れ地を巡り、見つからないと「出て来た自分の家」に戻ります。家が掃除され、整えられているのを見ると、自分より悪い七つの霊を連れて住み着きます。「七」は完全数であり、結末が以前より悪くなるとの誇張が、解放後にも危険が残ることを際立たせます。家を当人の内面だけに限定せず、共同体や社会の姿として読む余地もあります。

ここで注意したいのは、苦しむ人を「悪霊に支配された者」と決めつけないことです。また、再び苦境に陥った人の信仰不足を責める読みは、たとえの向きを逆転させます。空いた家が問題なのは、清潔さが足りないからではありません。排除の後に、新しい関係と生を満たすものが必要なのです。

説教のキーワードは「空白のままにしない」です。キリストが悪と戦うとは、害を除くだけでなく、孤立した人が尊厳をもって生きられる場を回復することです。私たちも、悪を退けた後に残る空白に、人を置き去りにしていないか問われます。受難へ歩むイエスは、悪を悪で制さず、傷ついた命のそばに立ちます。私たちの力が尽きる時にも、キリストは今もそこにおられます。空白は悪のものではありません。キリストがそこを交わりで満たし、孤立した命を必ず希望へと連れ戻すのです。

賛美歌

446「主が手をとって起こせば」「悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と周囲からレッテルを張られたイエスの癒しの業が、イエスと出会った人たちにとってどれほど命の喜びに満ちたものだったのかを鮮やかに歌います。『Jumping Jesus〜コリンギブソン編　ニュージーランドの創作賛美歌集』10**「住まいなく、仕事もなく」**　悪霊の頭と呼ばれても、苦しみにある人たちと共に生きたイエスが指示した「神の国の逆説」が歌われています。前出の**563「ここに私はいます」**もおすすめです。レントの賛美歌から**289「ああ主は誰がため」**　3節の歌詞「主は人の罪を負いたまえば」は、「人の罪」とは、聖書で罪人と呼ばれる人たち指すのか、そう言っている人たちの姿を指すのか。自らを振り返り、主がわたしのために世の苦しみを生きてくださったことを歌いたいと思います。

奏楽曲

446「主が手を取って起こせば」新垣壬敏 ⑮
『讃美歌21』81「主の食卓を囲み」の作者、新垣壬敏氏の書かれた前奏曲。賛美歌のモティーフを展開させながら進み、最後の8小節で賛美歌全体が弾かれ、「これぞ神のみわざ」に向かって盛り上がる印象的な前奏曲。

294「ひとよ、汝が罪の」P.Ludders ⑭
賛美歌（コラール）の旋律は上声部で原形のまま置かれています。左手で弾かれる低声部は八部休符から始まるリズムが特徴的です。この前奏曲のポイントは内声の動きです。歌詞の内容によってリズムや旋律の動きが変わります。歌詞を思い出しながら演奏してください。

2/28 受難の予告

復活前節第4主日　受難節第3主日　四旬節第3主日

イザヤ63・7〜14
Ⅱテモテ2・8〜13
ルカ9・18〜27
詩編107・1〜16

主日解説

復活前第4主日は、受難へ進むイエスと、その後に従う者の道を見つめる主日です。イエスは弟子たちに「群衆はわたしを何者だと言っているか」と尋ね、「あなたがたは」と問い返します。ペトロは「神からのメシア」と答えますが、イエスは口止めし、人の子の受難を語ります。

メシアにはイスラエルを救う王への期待が重なっていました。しかしイエスが告げるのは、長老、祭司長、律法学者という指導者たちに退けられ、殺され、三日目に神によって復活させられる道です。「必ず」は、神が苦しみを好むという意味ではなく、神の国を告げる歩みが権力との衝突を避けられないことを示します。正しい称号も十字架を抜きにすれば別の期待に変わります。

続いてイエスは「皆」に日々、十字架を負って従えと語ります。「日々」はルカだけの言葉です。十字架を負うとは、病気や困難を「あなたの十字架」と呼び、耐えるよう求めることではなく、命や尊厳を損なうことでもありません。イエスに従い、保身を手放し、他者の命を守る側に立つことです。命を失う者が命を救うという逆説は、命の価値を軽くする言葉ではありません。

27節の「神の国を見る」という約束は、直後の山上の変貌へつながります。弟子たちはそこで受難へ進むイエスに神の栄光を垣間見ます。それは完成ではなく、十字架の先にある復活を先取りする出来事です。

説教のキーワードは「日々、従う」です。受難の予告は、苦しみを美しく語るためではありません。拒まれても命を生かす道を退かなかったイエスが、私たちの先を歩いておられます。十字架の道の終わりにあるのは敗北ではありません。命を奪う力を打ち破り、神が命をよみがえらせる朝なのです。

賛美歌

298「ああ主は誰がため」　主の受難は一体だれのためのものなのか。受難節に十字架の前にたつわたしたちへの問いかけから始まる賛美です。305「イェスの担った十字架は」　主の受難が敗北ではなく、わたしたちのいのちに実りをもたらすと歌います。516「主の招く声が」　「わたしについてきたいものは、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」という主の招きと響きあう賛美です。4節は特に、「新しい課題も、日々のわざも」と歌います。

奏楽曲

305「イエスの担った十字架は」H,van Nieuwkoop ⑭

オランダの新しい賛美歌に合わせてつくられました。最初と最後の4小節で低声部で長く伸ばして弾かれるG音が印象的です。冒頭から中声部と上声部で賛美歌らしい旋律が弾かれ、９小節から低声部と上声部で１小節遅れのカノンになります。しばしば中声部で弾かれるE（ミ）の音が印象的です。

516「主の招く声が」高浪晋一 ⑬

2月10日の灰の水曜日でご紹介したものとは別の作者の前奏曲です。2声の曲です。始めは右手に賛美歌の旋律、2回目は左に賛美歌の旋律が置かれています。数の鍵盤があるオルガンの場合はそれぞれ旋律の方を少し印象的な音色にすると、より賛美歌の旋律が聞こえます。賛美歌の前奏曲の一つの役目はそれぞれの賛美歌の持つ歌詞の内容を音楽的なイメージで伝えることで、そのためにはどこかでその賛美歌の旋律が聞こえる必要があります。そのためには弾き手の方はどこに讃美歌の旋律が弾かれているのかということを事前に楽譜をよく見て理解しておく必要があります。

3/7

復活前節第3主日　受難節第4主日　四旬節第4主日

主の変容

出エジプト34・29〜35
Ⅱコリント3・4〜18
ルカ9・28〜36
詩編29・1〜11

主日解説

復活前第3主日は、受難へ向かう中で、イエスの姿が変わる出来事を読みます。これは受難の予告から8日ほど後に起こります。栄光は苦難を忘れさせる光ではなく、十字架へ進むイエスは何者であるかを弟子たちに示す光です。

イエスが山で祈ると、顔の様子が変わり、衣は輝きます。現れたモーセは律法と出エジプトを、エリヤは預言者と終末の希望を担う人物です。共に山で神の声を聞きました。二人を並べることでイスラエルの歴史と希望がイエスへつながることが示されます。彼らが語る「最期」は、原語では「出発」すなわちエクソダスです。イエスの死と復活が、新しい解放として描かれます。

弟子たちは眠気に襲われ、目覚めて栄光を見ても、出来事を理解できません。ペトロは3人のために仮小屋を建てようとします。彼を責めるより、この時を留めたい願いを読み取りたいところです。けれども栄光は山上に囲い込めません。イエスは苦しみの待つ平地とエルサレムへ下ります。

雲が彼らを覆い、声が「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と告げます。詩編29編が神の声の力を歌うように、見る以上に聞くことが求められます。モーセとエリヤが去り、残るのはただイエスです。二人はイエスと同列ではありません。弟子たちの沈黙も、分からないまま言葉を抱く信仰の始まりになり得ます。

説教のキーワードは「彼に聞け」です。私たちは確信を保てない時があります。それでも神の声は、受難へ進むイエスこそ聞くべき方だと告げます。山を下り、傷つく人のもとへ向かうイエスに聞くなら、恐れの中にも道が開かれます。光は山に消えたのではありません。キリストと共に、苦しむ命のただ中へ降りて来るのです。

賛美歌

285「高き山の上」 聖書日課の物語を歌詞とする賛美歌です。297「栄えの主イェスの」 「栄え」「ほまれ」「誇る」「かがやく」など、聖書日課のキーワードを用いながら、十字架の逆説を歌っています。312「紅海を渡り」 出エジプトの出来事と主の十字架が、過ぎ越しの食卓を軸に、同時に歌われています。モーセ、エリヤ、イエスに共通するのは、苦難の中で自らの使命を神の前に祈り求める40という数字です。440「備えて祈れ」、463「わが行くみち」など、自らの歩むべき道を祈り求める賛美もおすすめです。

奏楽曲

293「栄えの主イエスの」C.Shalk ⑭
「Humburg」というチューンネームで知られている賛美歌の前奏曲。上声部に賛美歌の旋律が置かれ、中声部、低声部は賛美歌の旋律の支える対旋律です。上声部の旋律をよく聞こえるように弾くためには音価を正確に弾くことが大切です。

440「備えて祈れ」J.G.Walther ⑮
『讃美歌21』では440番は4分の4拍子で書かれています。Waltherの前奏曲は4分の3拍子ですので、讃美歌と前奏曲では少し印象が違います。ですから前奏曲を弾く前に、曲の中で弾かれる16分音符の速さなどをよく思い浮かべてから弾きだすようにしてください。バロック時代の作品によくみられる装飾音については、書いてあるから必ず付けなければならないではないのではありません。装飾音を付けることで大切な音を弾かなくなったりすることがないように工夫してください。

3/14

復活前節第2主日　受難節第5主日　四旬節第5主日

十字架の勝利

哀歌1・1〜14
ヘブライ5・1〜10
ルカ20・9〜19
詩編54・3〜9

主日解説

復活前第2主日は、受難を前に、十字架に現れる神の勝利を見つめます。イエスは神殿で権威を問われた後、ぶどう園と農夫のたとえを語ります。農夫は直接にはイエスに敵対する宗教指導者を指します。しかし託されたものを自分の所有物にしたがる農夫の姿は、私たち人間の姿を映します。

主人は収穫のため、僕を繰り返し送ります。農夫たちは僕を殴り傷つけ、何も持たせず追い返します。僕たちには、神から遣わされ、拒まれた預言者たちが重なります。最後に送られるのは、僕とは異なる「愛する息子」です。農夫たちは相続財産を奪おうと息子を殺します。この愛する息子に、受難の道を歩むイエスが重なります。

主人は農夫を滅ぼし、ぶどう園を「ほかの人々」に与えます。これは福音が民族の壁を越え、実を結ぶ歩みを思わせます。しかし、神がユダヤ人を捨て、別の民族を選んだという意味ではありません。問われるのは、託されたものを独占する姿勢です。私たちも共同体やその働き、そこに集う人々を、自分の所有物のように扱っていないでしょうか。

イエスは詩編118編を引用し、「家を建てる者の捨てた石が、隅の親石となった」と語ります。十字架の勝利とは、神が暴力で敵を滅ぼすことではありません。権力に捨てられ、殺されたイエスを神が復活させ、新しい共同体の礎とする逆転です。

説教のキーワードは「託されたもの」です。私たちが握り締めているものを神に返す時、ぶどう園は再び命を育む場所になります。世が見捨てた命を、神は決して見捨てません。十字架で終わったはずのイエスは、神によって復活させられました。捨てられた石から、誰も排除されない新しい家を、神は今も建てておられるのです。

賛美歌

295「見よ、十字架よ」　ぶどう園に送られた愛する息子と十字架への道を辿るイエスの結末が重なる。
568「朝日はのぼり」　愛する息子をぶどう園に送る主人の愛を思い起こして歌いたい。
164「バビロンの流れの」　哀歌より選曲。イエスの受難にバビロン捕囚、そして私たちの苦しみを重ねつつ、神の助けを祈る。
390「主は教会の基となり」　イエスが引用した詩編118編にある「隅の親石」から、教会の基となった主を賛美する一曲。

奏楽曲

295「見よ、十字架を」G.Raphael ⑭
低音部と高音部に交互に賛美歌（コラール）の旋律が出てきます。また4分の6拍子、4分の5拍子、4分の4拍子の3つの拍子が出てきます。拍子の変化はあまり難しく考えず、4分音符を一つに数えることをお勧めします。もし複数の鍵盤のオルガンがあれば、賛美歌の旋律とその対旋律と音色を変えると、より賛美歌の旋律が聞こえます。

390「主は教会の基となり」P.Bunjes ⑰
賛美歌は4分の4拍子ですが、前奏曲は8分の12拍子です。15小節目だけ8分の６拍子に変わるのでご注意ください。賛美歌の旋律はおおよそ上声部にありますが規則性がありません。賛美歌の3段目の旋律ははっきりしていません。しかし賛美歌の4段目の最後のフレーズは再び上声部に現れ、旋律が上行し前奏曲を締めくくります。フェルマータを十分に伸ばし、最後のコーダをしっかり弾いてください。

3/21

復活前節第1主日　受難節第6主日　四旬節第6主日
棕梠の主日／受難週（3月27日まで）

十字架への道

イザヤ56・1〜8
ヘブライ10・1〜10
ルカ(22・39〜23・31)23・32〜49
詩編22・1〜22

主日解説

ヘブライ語の名詞でカーボードという言葉があります。「栄光」「名誉」と訳すことの出来る言葉です。この語は、元来は「重さ」を意味する言葉です。自分が重んじられること、それが名誉を与えられることとつながっているのですね。このニュアンスというのは、現代の日本に生きる私たちも実感をもって理解できるものではないでしょうか。私たちは、人から「重んじられている」と感じたとき、とても嬉しく思うものです。誇りに思うものです。反対に、人から「軽んじられている」と感じたとき、とても辛い気持ちになります。侮辱されたように感じ、心が痛みます。この痛みは言い変えれば、「尊厳がないがしろにされる」ことの痛みだと言えるでしょう。

今週からは受難週に入ります。受難物語はイエスがその十字架への道において、他者から軽んじられることの痛みを極みまで経験されたことを示しています。ルカ福音書22・63－65ではイエスが見張りをしていた者たちから侮辱され、暴行を受ける様子が記されています。見張りたちの行為はまさに他者を軽んじ、その尊厳をないがしろにすることの極みのような行為です。主のお苦しみを想い起こすことによって、私たちは「痛みを痛みとして感じる」感覚を再び取り戻すよう招かれています。苦しみを受けるイエスのお姿は、尊厳をないがしろにされる私たちの現実を映し出しています。

受難物語を読み進める中で、もう一つ、知らされることがあります。それは、徹底して軽んじられる経験をしてもなお、イエスの内には尊厳の光がともっているということです。決して失われないその光は、神さまからの尊厳の光に他なりません。苦しみのただ中で尊厳ある主のお姿は、どんな力も、暴力も、神からの尊厳の光を奪うことはできないことを示しています。イエスを通して輝き出でたこの消えることのない光は、今、私たち一人ひとりを照らしています。

賛美歌

112「イェスよ、みくにに」　十字架にかけられていた犯罪者の言葉から。私たちもイエスと共に今日、楽園にいるために。

280「馬槽のなかに」　特に3節の言葉を、イエスの誕生からその生涯を辿る詞の中で味わいたい。

301「深い傷と流れる血に」　「あなどられて　世に捨てられ、責めと恥」を受けながらなお神からの尊厳の光を失わなかったイエスを思って賛美したい。

314「神の国の命の木よ」　イエスの受難、十字架、そして息を引き取る前に言われた「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」はいつか命の終わりを迎える私たちの模範的な姿。

奏楽曲

280「馬槽のなかに」文屋知明③

初めから8小節目までは上声部に、9小節目から16小節目までは低声部に賛美歌の旋律が出ています。19節目からは賛美歌の旋律が散りばめられたヘ短調の20小節が続き再びヘ長調の最初に戻り終止します。イエスの生涯を思いながら演奏してください。

301「深い傷と流れる血に」D.Busarow⑭

曲を通じて無窮動に8分音符と低声部の付点4分音符が続く中、15小節目から上声部に賛美歌の旋律が弾かれます。賛美歌の前半が終わると再び最初の2声の動きが始まり、29小節から賛美歌の後半が上声部で始まります。30小節からは最初と同じ2つの動きが始まり、その動きが次第に上昇し、終わります。8分音符の動きは深い傷からゆっくり流れだす血を表現しているのでしょうか。

3/25

洗足木曜日

主の晩餐

創世記14・18〜20
Ⅰコリント10・16〜17
ルカ22・14〜38
詩編116・1〜19

主日解説

イエスは十字架におかかりになる前、弟子たちと最後の食事をされました（最後の晩餐）。ルカ福音書22章はその食事の席における「主の晩餐」の場面を記しています。19節《これは、あなたがたのために与えられる私の体である。私の記念としてこのように行いなさい。…》。イエスご自身による制定の言葉として、聖餐式の式文に取り入れられてきたものです（Ⅰコリント11・23〜26も参照）。裂かれたパンは十字架におかかりになったイエスの体を表し、ぶどう酒は私たちのために流されるイエスの血を表しています。

パウロは、聖餐が私たちを一つに結び合わせるものであることを強調しています（Ⅰコリント10・17）。聖餐は元来教会に一致をもたらすはずのものですが、これまでのキリスト教の歴史において聖餐は分離を引き起こす要因となってきました。ルカ福音書でも主の晩餐の直後に弟子たちが言い争う場面が記されています。「自分たちの内で誰が一番偉いか」の言い争いが起こってしまったのです。イエスはおっしゃいました。《あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい》（22・26）。ルカ福音書に洗足の場面は記されていませんが（洗足はヨハネ福音書13章を参照）、この言葉は自ら身を低くし弟子たちの足を洗われたイエスの姿と響き合っていると言えるでしょう。

イエスが弟子たちの足を洗ったその行為は、人に仕えることを教えるものであると共に、十字架の出来事を指し示すものでした。足が私たちの体全体を支えているように、イエスの十字架は私たちの存在を最も深き場所から支えてくださっています。そして私たちを一つに結び合わせてくださっています。洗足木曜日の今日、イエスの十字架において現わされた神の愛に心に向けたいと思います。

賛美歌

76「今こそ歌いて」　この日、聖餐式を執行する教会のために。
487「イェス、イェス」　洗足木曜日に弟子たちの足を洗うことを通して人に仕えることを教えてくださったイエスの愛を覚えて歌いたい。
499「平和の道具と」　聖餐は私たちを一つに結び合わせる。一致のために必要なことが何かを教えられる一曲。
543「キリストの前に」　弟子の足を洗うイエスを歌いつつ、イエスを私たちの土台として生きることを勧める。

奏楽曲

487「イエス、イエス」高浪晋一 ⑬
低声部と上声部で交互に賛美歌の旋律が弾かれます。後半は１オクターブ上がり曲の盛り上がりが感じられます。8分の6拍子の特徴である１小節を二つに感じて弾いてください。
499「平和の道具と」志村拓生 ⑮
4分の５拍子という日本人にはなかなかしっくりいかない拍子ですが、曲の流れをフレーズで感じると弾きやすくなるような気がします。前半は臨時記号が多いので注意してください。後半は3声のカノンのような形になります。一つ一つの声部の横の動きを感じると弾きやすくなるかもしれません。終わりから3小節目のフェルマータをフォルテで十分に伸ばし、ピアノで終わってください。

受難日

3/26 キリストの死

イザヤ52・13〜53・12
ヘブライ10・11〜25
ルカ23・32〜49
詩編31・1〜17

主日解説

十字架のもとには、一人の人が立っていました。ローマの百人隊長です。十字架刑を監視する役割を担っていた彼は、十字架上のイエスのお姿を見て、《本当に、この人は正しい人だった》と言って神を賛美しました（ルカ23・47）。ルカ福音書はここで、イエスが「正しい人間」であったことに強調点を置いています。その「正しさ」は、イエスの十字架上の最期の言葉に最もよく表されています。

十字架の上でイエスは、《父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです》（34節）と祈られました。ここでの《彼ら》とは、他ならぬ私たち一人ひとりであると受け止めることができるでしょう。イエスのその正しさを通して、この世界に神の愛とゆるしとが示されました。《…私の正しき僕は多くの人を義とし／彼らの過ちを自ら背負う》（イザヤ書53・11）。

また、十字架の上でイエスは、隣で十字架刑に処せられている男性に対して、《よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる》（ルカ23・43）と宣言されました。この宣言は、いつか死を迎える私たちに対しても語られているものとして受け止めることができるでしょう。イエスの正しさを通して、神の命の光が示されました。

そしてイエスは十字架の上で、すべてを神に委ね、《父よ、私の霊を御手に委ねます》（46節。詩編31・6参照）と大声で叫んで息を引き取られました。神の前での謙遜と従順をまっとうされたイエスは、その正しさゆえ、神よってその右の座にまで高く引き上げられました（昇天の出来事の啓示。イザヤ書52・13、フィリピ2・8、9も参照）。

受難日の今日、十字架のイエスが示してくださっている正しさに心を向け、その正しさを通して現わされた神の愛と命の光に私たちの心を向けたいと思います。

賛美歌

87「罪なき小羊」 イエスの十字架の意味をかみしめ、イエスのあわれみと平和が与えられることを祈る。
293「救いのぬしは罪もなしに」 ボヘミア兄弟団の曲。詞を通してイエスの受難物語全体を味わう。
306「あなたもそこにいたのか」 イエスを墓におさめたときにいた人物を自分自身に重ねつつ、最後の5節を歌い、神の深い愛を受け止めたい。
442「はかりも知れない」 十字架の上で敵をゆるし、私たちの罪をもゆるす神を賛美したい。

奏楽曲

87「罪なき小羊」J.Pachelbel ⑯
４声のフゲッタ（小フーガ）。賛美歌の最初のフレーズがソプラノ、アルト、テノール、バスの順に弾かれ、次はアルト、ソプラノ、テナーの順に、最後にバスで弾かれ終止します。テーマである賛美歌の最初のフレーズがヘ長調のFから始まり、次は5度上（4度下）のCから、次の声部は再びFから、そして次はCから、最後はFに戻る、というフーガの基本的な規則のもとで作られています。賛美歌の最初のフレーズがしっかり記憶に残るように演奏してください。
293「救いのぬしは罪もなしに」G.F.Kaufmann ⑭
初めから終わりまで２声です。上声部に賛美歌の旋律が全音符で弾かれ、低声部はその対旋律。ワンフレーズごとに低声部から始まり、次の小節から上声部で始まる賛美歌の旋律の最初の旋律をソプラノの賛美歌の旋律を誘導するように、半分の２分音符で弾く。とても分かりやすい構造ですが、カウフマンのセンスが光っています。低声部、上声部の音色を変えなくても音の動きではっきり２つの声部の違いがわかります。

3/28

復活日･イースター(前夜または早朝)

キリストの復活

出エジプト14・15〜22
ローマ6・3〜11
ルカ24・1〜12
詩編30・1〜13

主日解説

復活という語は、原文のギリシャ語（アナスタシス）では「立ち上がる」「起き上がる」という意味を持つ言葉です。福音書が記す復活は、イエス・キリストが「復活した」出来事であると同時に、残された人々が「再び立ち上がらされていった」出来事でもあります。

イエスの十字架の死と埋葬に立ち会った女性たちは、悲しみの中で立ち上がれないでいました。私たちもまた、もう起き上がることができないと思うほど辛い経験をすることがあるでしょう。詩編は、私たちが生きていく中で経験するその暗闇を「陰府（よみ）」と表現しています。光が届かない、暗い地下の世界を指す言葉です。神から断絶され、隣人からも断絶された暗闇、そこが陰府です。

詩編30編では、その陰府から神が引き上げてくださったことへの感謝が謳われています。《主よ、あなたは私の魂を陰府から引き上げ／墓穴に下る者の中から生かしてくださいました》（4節）。《あなたは私の嘆きを踊りに変え／私の荒布を解き、喜びを帯とされました》（12節）。これらの言葉は、まさにイースターにふさわしいものだと言えるでしょう。

イースターの日の朝、女性たちは空の墓の前で、天使から復活の知らせを聞きます。深い悲しみの中で立ち上がれないでいた女性たちの魂は、この知らせによって、再び立ち上がらされていきます。女性たちは墓から帰り、この知らせを弟子たちに知らせます。残された人々は、イエスの復活の出来事によって、「陰府から帰る＝陰府（よみ）がえり」の力が与えられていったのです。

困難の中にあってもなお、私たちは再び立ち上がることができる。復活のキリストに結ばれた私たち一人ひとりにはその「陰府がえり」の力が与えられていることを心に留めたいと思います。《私たちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます》（ローマ6・8）。

賛美歌

205「今日は光が」復活日の開会賛美に選びたい歌詞。
230「『起きよ』と呼ぶ声」「復活」と訳される語の持つ意味と、光が届かないと思える陰府に神が光をもたらし、私たちを立ち上がらせてくださることを覚えて選曲。
318「勝利の声を」出エジプト記とルカによる福音書の箇所から。
322「天の座にいます」復活の場面を高らかに歌いつつ、ハレルヤと賛美したい。

奏楽曲

205「今日は光が」飯　靖子②
小節の前奏の後に左手に賛美歌の旋律が弾かれ、右では2拍は４拍目にスタッカートがつけられた和音が弾かれます。17小節から賛美歌の後半が右手で弾かれます。27小節から少しゆったりと賛美歌が3声で弾かれます。この部分は5節ある歌詞のどこかで用いることもできます。

230「『起きよ』と呼ぶ声」J.G.Walther ⑯
この賛美歌はアドヴェントにしばしば歌われます。上声部に賛美歌の旋律が2分音符で弾かれ、下の３声部では上声部で弾かれている賛美歌の断片が所々で弾かれます。

322「天の座にいます」Johannnes Petzold ⑭
最初の８小節は讃美歌の旋律が左手に置かれ、9小節から右手の上声部に置かれています。賛美歌の旋律は低声部で４分音符で弾かれますが、上声部でその旋律を３連音符の動きで重ねています。最後の「ハレルヤ、ハレルヤ」のところは下の２声部が縮小されたリズムで重ねています。

3/28

復活日･イースター(日中)

キリストの復活

エレミヤ31・1〜6
Ⅰコリント15・12〜20
ヨハネ20・1〜18
詩編30・1〜6

主日解説

2018年4月に55歳で天に召された榎本てる子牧師。病床のてる子さんが最後の最後までFacebookに綴っていた日記が、『愛し、愛される中で――出会いを生きる神学』という本にまとめられました。亡くなる4日前に記した最後の日記に、お姉さんからのメールが引用されています。そこに詩編30編6節の引用がありました。「神さまは必ず、泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださいます。てる子、おやすみなさい」。てる子さんもお姉さんも、この詩編によって復活の朝を望み見ました。

復活を信じるとは、神の愛がこの世の何よりも、死よりも強いと信じることです。だからパウロは「キリストが復活しなかったのなら、私たちの宣教は無駄であり、あなたがたの信仰も無駄になります」(Ⅰコリント15・14)と書きました。神の愛よりも死が強いなら、信仰も宣教もまったく意味をなしません。

でも、死が我が物顔でふるまっているこの地上で、神の愛の勝利を信じるのはなんと難しいことでしょう。それは週の初めの日、イエスの墓に最初に駆け付けたマグダラのマリアも同じでした。

空の墓を見て、イエスの遺体が失われたことに泣いていると、誰かが「マリア」と呼びかけます。その声に彼女は「振り向いて、ヘブライ語で、『ラボニ』と言った。『先生』という意味である」(ヨハネ20・16)。

この「振り向いて」と訳された動詞は、「よく言っておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ18・3)の「心を入れ替えて」と訳された動詞と同じです。マリアは振り向きました。それは心の向きを変え、心を入れ替えていただき、神の愛の勝利を信じる者となったということです。だからマリアは、今目の前にいるのが、復活のキリスト、愛するラボニであることがわかりました。

今朝、復活の主が私たちの名をも呼んでくださっています。神の愛の力を信じる方を向くために。

賛美歌

316「復活の主は」　礼拝プログラムにキリエを入れている教会でぜひとも賛美したい。
325「キリスト・イエスは」　原題の意味は「キリストは今日、復活する」。キリストの復活が過去の出来事ではなく、いまここで起きていることを感じつつ賛美したい。
331「主はよみがえられた」　テゼ共同体の賛美歌。繰り返し歌いたい。
333「主の復活、ハレルヤ」　原題の意味は「喜びます、ハレルヤ」。主イエスの復活は私たちに何よりの喜びをもたらす。

奏楽曲

316「復活の主は」J.K.F.Fischer ⑭
316番の賛美歌の冒頭のフレーズをテーマにしたフゲッタ。アルトから始まり、ソプラノ、ベース、テノールとテーマが引き継がれ、曲を通して11回のテーマが弾かれます。イースターの伝統的な賛美歌（コラール）からキリストの復活のよろこびが伝わってくるような気がします。

325「キリスト・イエスは」Healey Willan ⑰
冒頭の前奏のような４小節で、十字架の死からよみがえるような音型で音が盛り上がって来て、そのあとから上声部で賛美歌の旋律が太いうねりのように弾かれ、下の３声部で力強くそれを支えています。中間部でも間奏のように同じ音型で盛り上がり、その後賛美歌の後半に進み、最後の５小節はCのオルゲルプンクト（保続低音）が加わり重厚なイースターのよろこびを感じます。

「主日礼拝に備えて」楽譜一覧

手鍵盤のみで演奏できる曲を中心に選んでいます。

① 『讃美歌21による新しい前奏曲集Ⅱ』（日本キリスト教団出版局、曲集No42）
② 『讃美歌21による新しい前奏曲集Ⅰ』（日本キリスト教団出版局、曲集No41）
③ 『讃美歌21による礼拝用オルガン曲集 第4巻』（日本キリスト教団出版局、曲集No34）
④ 『讃美歌21による礼拝用オルガン曲集 第1巻』（日本キリスト教団出版局、曲集No31）
⑤ 『讃美歌21による礼拝用オルガン曲集 第3巻』（日本キリスト教団出版局、曲集No33）
⑥ 『やさしい礼拝用オルガン曲集Ⅰ』（日本キリスト教団出版局、曲集No38）
⑦ 玉理照子『こどもさんびか改訂版・讃美歌21奏楽曲集』（日本キリスト教団出版局）
⑧ 玉理照子『オルガン曲集 地には平和』（日本キリスト教団出版局）
⑨ BACH『Orgelchorale der Neumeister-Sammlung』（Bärenreiter-Verlag）
⑩ 『in Ewigkeit dich loben 1』(Breitkopf & Härtel)
⑪ 『The Parish Organist part six』(Concordia Publishing House)
⑫ REBECCA GROOM TE VELDE『hymn miniarures 1』(Oxford University Press)
⑬ 高浪晋一『賛美歌による奏楽曲集「讃美歌21」「こどもさんびか改訂版」をもちいて』（高浪音楽工房）
⑭ 『讃美歌21による礼拝用オルガン曲集 第5巻』（日本キリスト教団出版局、曲集No35）
⑮ 『讃美歌21による礼拝用オルガン曲集 第6巻』（日本キリスト教団出版局、曲集No36）
⑯ 『Achzig Choralvorspiele』(Edition Peters)
⑰ 『The Parish Organist 8』(Concordia Publishing House)

高浪晋一編曲『讃美歌21』やさしい伴奏譜　電子版好評配信中！

『讃美歌21』やさしい伴奏譜
～ゆとりを持って弾くために～

運指番号つきで
初心者でも
取り組みやすい

▶弾きやすく、ミスタッチを軽減
▶オルガン（パイプ・電子・リード）、ピアノ、キーボード、どの鍵盤楽器でも使える
▶歌詞の書き込みスペースあり

Web上にガイド
「会衆と共に賛美をささげるために」を掲載
この伴奏譜の目的、運指テクニックの説明・動画等が見られます。
https://bp-uccj.jp/files/21YBGuideTakanami.pdf

ご購入は
Piascore（ピアスコア）楽譜ストア
Piascore 楽譜ストア で！

●本シリーズ電子版楽譜は、インターネット上の〈**Piascore楽譜ストア**〉で販売します。
●**各曲150円（10%税込）**で、**1曲ずつ**お求めいただけます。

〈Piascore 楽譜ストア〉内、
日本キリスト教団出版局のページはこちら
https://store.piascore.com/search?c=5798

＊初回購入時にユーザー登録の手続きが必要です。
＊お支払いは原則クレジット決済です。1,000円以上のご購入で銀行振込もご利用いただけます。